

などの漢籍書のほか、兵法、医学、卜筮（ト法と筮法という占い）、天文学といった典籍を学びました。

学校は鎌倉・室町・安土桃山・江戸時代を経て、明治5年（1872年）まで存続しましたが、日本の教育の全面西洋化にともない廃止されました。現在、足利学校では毎年秋に、大規模な伝統行事「曝書」（貴重な書籍の虫干し）を行います。学校の職員は曝書の作業が任務の1つとなっていて、私は初め作業した時のことをよく覚えています。

大切に保存されている数百年前の漢籍書に両手で触れると、脳裏には、正座して胸を張り、厳肅な態度の当時の学徒たちが、先生の朗読について朗々と本を読む光景が浮かび上がりました。私は思わず一緒に聴講しているような幻想にとらわれて……同僚に何度も名を呼ばれて、ようやく我に返ったのです！ 当時の足利学校の講義の気迫は、おそらくこのように非凡であったと容易に想像できます。

毎年11月23日、学校の孔子廟では「釋奠」が執りおこなわれます。この孔子祭のために足利学校は1

日休館日を設け、職員全員で校舎の中から外から大掃除をし、きれいな状態にして孔子の神霊を迎えるのです。

### 足利学校との縁を結んだ「中庸の道」

私と日本、そして足利学校との縁については、2001年から話さなければなりません。当時、家畜の繁殖の研修で来日する機会があり、その間にいまの夫と知り合いました。1年の研修が終わり、私は帰国しましたが、私たちの恋愛はまだ続いていました。ほどなくして結婚のために日本を再訪、結婚後はずっと日本で暮らしています。

日本では、いろいろな仕事に挑戦しました。足利学校に入る前は、隣の市の教育委員会で教育関係の仕事をしました。教育に携わり、研究するのはとても好きです。私の原籍は中国の山東省、そこは孔子のふるさとで、私も孔子の末裔です。

現在は栃木県足利市に住んでいます。4年前のあ

る週末、たまたまでしたが、足利学校の日曜論語クラスに参加しました。そこで白髪交じりの日本人講師が『論語』『雍也編』の次の一節を解説してくれました。

子曰、中庸之為徳也、其至矣乎。民鮮久矣。

——子曰わく、中庸の徳たるや、其れ至れるかな。

民鮮きこと久し。

（先生がいわれた。「中庸の徳というものは、人として至高のものである。この徳が人々の間で廃れてしまっただけならしくなる。残念なことだ」と）

その講師は、「宥座之器」と呼ばれる水汲みの装置で、中庸の道とは何かを説明されました。壺状の器は、水が入っていない時は傾き、ちょうどいい時はまっすぐに立ち、水を入れすぎるとひっくり返ってこぼれてしまいます。これが中庸の道というところの「虚則欹、中則正、満則覆」（虚なれば則ち欹き、中なれば則ち正しく、満つれば則ち覆る）の道理なのです。

私は講師のそばに立ち、30分ほどの話を聞いていたのですが、とても勉強になり、実に感慨深い思いを抱いたのです！

この時から、私は『論語』の学習と研究、普及と深化に強い興味を覚え、また自信を持つようになりました。私たちが暮らすいまの世界は、一面ではサイエンス・テクノロジーと社会建設で大きな成果を収めました。もう一面では、平和と発展の重責を担い、環境保護や和諧社会（調和のとれた社会）の構築、道徳危機の救済など、多くの深刻な問題の解決がいまなお求められています。

まさに以前、ノーベル賞受賞者がいった言葉があります。「人類が21世紀に生存していくには、2500年前を振り返り、孔子の知恵を吸収しなければならぬ」（1998年の「パリ宣言」）。私は、儒学は一般人の生活に入っこそ、その生命力が絶えず得られ、あふれるのだと思う。一般人の生活に儒学を留めてこそ、それはリアリティーと永遠の価値を備えるのです。